

## 幕末明治の写真師列伝 第十九回 下岡蓮杖 その十八

明治2年(1869)2月、下岡蓮杖は写真館を経営する傍ら、新しいプロジェクトを起こすことを考えていた。

明治3年(1870)、下岡蓮杖は弟子の横山松三郎と日光山の写真撮影旅行を行うことになった。撮影を行うカメラマンのメインは弟子の横山松三郎である。これはその前年の明治2年(1869)から計画、準備していた企画で、明治3年(1870)になってようやく日光東照宮の撮影許諾も得て行われた撮影旅行であった。今風にいえば、プロデューサー・下岡蓮杖&横山松三郎、撮影カメラマン及び撮影ディレクター・横山松三郎という大企画である。蓮杖がその資金として五百円を出し、松三郎も百円の資金を出して、日光の山中で半年もの間、日光東照宮の社殿や回廊、唐門などのほか、華厳の滝、寂光七瀧、中禅寺湖など、山水の奇趣ことごとくを撮影していた。撮影ポイントも裏日光の庚申山の奇岩や滝にまで及び、特に滝の撮影では樹木や岩石が撮影の障害ともなったが、松三郎は岸壁の大木に縄をかけて、その一端に自分の体を縛り、撮影機材を背負って人夫と共に少しずつ降下して絶壁を下って谷底まで降りて、そこで思うままの構図で撮影を行った。松三郎の撮影に対する熱意は概ねこのような感じであったのだ。

この時に撮影の便宜をはかったのは、日光東照宮の輪王寺書役であった片岡久米で、片岡は撮影にも同行し、岩の上で帽子を振る松三郎の様子を撮影している。また、この片岡は松三郎の弟子となって写真術を学び、松の字を貰って片岡如松と改名して、後に日光で開業し、栃木県の営業写真師の開祖となった。この片岡写真館は1971年に栃木県室町に移転して、現在は写真館4代目の片岡惟光氏が継がれている。

ついでながら、松三郎はこの撮影の時に滞在した紙半旅館(下鉢石町)の主人・福田半兵衛の長女・蝶(ちょう)と結婚している。松三郎と蝶の間には子供がいなかったため、松三郎は甥の慶次郎(松三郎の妹・千代の息子)を養子に迎えている。この慶次郎は後に横山慶と改名した。

日光山の撮影が終わると、蓮杖はまずこの写真を徳川公へ献上した。徳川公は蓮杖と松三郎の労をねぎらって高級紬を与えている。この時に撮影された日光山関係の写真は、東京国立博物館所蔵の写真や、横山家に残った「祖父松三郎遺影」の写真アルバムなどで見ることができる。

蓮杖はまた泉岳寺で赤穂義士の木像や湯島聖堂の木像の写真撮影も行っている。(明治3年頃の撮影)この時に撮影助手として付いていたのがまだ幼かった頃の、後の二代目・鈴木真一である。湯島聖堂の木像とは、孔子、孟子、子思、顔淵の四体の木像で、木像参拝と称して毎年、正月元旦の日に幕府の儒者が礼拝するほかは、一般には公開されていない木像であった。湯島聖堂の木像の写真は3点、現在は東

京国立博物館に所蔵されている。

明治5年(1872)7月21日未明(夜11時出火)、米国太平洋郵船会社の太平洋



湯島聖堂の木像の写真(戸塚幸民『関東写真蓮杖』口絵写真より)

航路定期船アメリカ号が横浜港の火災により焼失した。(『東京日々新聞』明治五年七月二十三日記事、『横浜毎日新聞』明治五年七月二十五日記事、『新聞雑誌 第五十六号』明治五年八月記事、『The Far East an illustrated fortnightly newspapers. vol.3』(Yushodo Booksellers 1965)の1872年9月2日号記事などに記載)アメリカ号は世界最大の木造汽船で、その日の朝六時に、サンフランシスコから到着したばかりであった。この火災により60名以上の犠牲者が出て、アメリカ号も全焼している。この夜は雨も降っていて、近距離でも見わけがつかないほど暗い夜であった。そのため火災の炎は鮮明であった。蓮杖は弟子の鈴木真一(二代目・鈴木真一のこと)を連れて、写真機材を携えてこの火災の様子を撮影し、翌日よりこの写真を複写して販売して、巨額の儲けを得ることができた。この写真は、石黒敬章編『下岡蓮杖写真集』(新潮社、1999年)や石黒敬章著『幕末・明治のおもしろ写真』(平凡社、1996年)にも掲載されている。松本碧著『写真の今昔』(日本写真興行通信社、1935年)にも、「夜間撮影に成功したのは明治5年7月21日夜、アメリカの汽船が火災を起こした時二代目鈴木真一とこの状況を埠頭から撮影した。」という記述がある。

また、蓮杖はあるアメリカ人の勧めで、一本の枯木を撮影したことがある。横浜の地は、元は漁村で、本村と弁天社の近くを除けばその他は索莫とした所であった。今の英国領事館のある近辺は「水神の森」と称して、有名な大松樹があった。しかしながら横浜大火の際にこの松は焼けてしまい、永らく枯木となっていた。この木を見る者はその奇異で古めかしいさまを愛していたのだが、何人かでこの松の木を伐採しようとしているのを、たまたまアメリカ人が見て、痛くこれを惜しみ、「この松の木は横浜の一大奇跡である。あなたはすぐにそこへ行って写真撮影しなさい。」と蓮杖に告げて、蓮杖もその言葉に応じて撮影することにした。蓮杖はカメラを道端に設置して、角度も調節し、いよいよ撮影しようとしたその瞬間、松の木は倒れて地に落ちた。この時に撮影した写真を、件のアメリカ人は大いに喜び、その後、その複写写真を多く購入して本国に送ったという。

(森重和雄)